プラトン『ティマイオス』執筆動機を巡って

和泉 ちえ

１．序

プラトンのコスモロジーを理解するために提示される座標軸は，従来複数存在する．まず第一に，プラトンと諸学派諸思想との邂逅と別れの軌跡を辿りながら縷々綴られる，彼の評伝をも兼ねる知的遍歴物語の枠組みが挙げられる．その基本的見取り図は文献学的真偽問題を本質的に抱えるプラトン『書簡集』を前提に据え[1]，さらに古来のアリストテレスをはじめとする諸証言を適宜加味しながら，ヘラクレイトスークラチュロスの系譜に付随する万物流転説一派[2]，またパルメニデスらの「イタリアの徒」の紐帯[3]，そしてピュタゴラス学派縁のアルキュタス・フィロラオス路線という[4]，三派三方向に伸びる座標軸の下，その限定された空間にプラトンの自叙伝的知的遍歴の諸断面が映し出されることになる[5]．この種のプラトン知的遍歴物語は，ディオゲネス・ラエルティオスやプルタルコスをはじめとする古代の伝記的諸証言からも看取されるように，世俗的次元での人物・思想理解に関する弁論術的説得性という意味において有効であるといえようが，また一方では，文献学的論拠に基づく史的確実性という観点において多々問題を孕んでいることも周知の通りである．

さて，第二の枠組みに議論を移そう．その枠組を構成する座標軸では，特に『ティマイオス』に現れるコスモロジーと範型イデア論の二つのパラメーターを相互に連動させ，両者の相関関係の軌跡を諸対話篇執筆順序という時間軸の上に投影する．この枠組みの中で繰り広げられたオーエン，チャーニスの対局は今日においても決着を迎えた訳ではなく[6]，プラトン諸対話編の執筆順序それ自体が内包する根源的諸問題に直面しながら，更に奥深い闇の中を彷徨う運命を背負うであろうと拝察される．この運命から逃れるためには，作品成立順序と作家自身の思想展開の対応関係を前提に据える常套的文学研究に由来する方

---

[1] Morrow（1929）; Fritz（1940）; Bluck（1949）; Stenzel（1953）; Edelstein（1966）; Gulley（1971）; Aalders（1971）; Michaelson & Morton（1972）; Blois（1979）; Sayre（1988）; Brumbaugh（1988）etc.
[2] Irvin（1977）; Kahn（1986）; Zovko（2002）; Colvin（2007）etc.
[3] Cherniss（1932）; Cornford（1939）; Rist（1970）; Solmsen（1971）; Fritz（1974）; Vlastos（1975）; Matthews（1999）etc.
[4] Thesleff（1962）; Lloyd（1990）; Huffman（1993）; Barker（1994）; Sedley（1995）; Meinwald（2002）; Huffman（2005）etc.
[5] プラトンの知的遍歴に関する 19 世紀以来の古典文献学的方法論に基づく研究蓄積総覧として Guthrie（1975）etc.
[6] Owen（1953）; Cherniss（1957）; Morrow（1968）; Keyt（1971）; Mohr（1986）; Sayre（1998）; Prior（2006）; Kahn（2007）etc.

法論に拘泥しないことであろうが，この種の方法論を踏襲するプラトン諸研究の蓄積を鑑みる限り[7]，そのレジームからの脱却を表明することもまた容易ではないと思われる．

第三の枠組みは，自然哲学およびミュートスの役割・意義という座標軸に立脚し[8]，プラトンのコスモロジーに内在する諸問題を，存在論，認識論，価値論，教育論，自然学，数学，神学，政治学，叙述形式等々の多角的観点から炙り出す視座を提供する[9]．その各々の議論は自由闊達で魅力的かつ拡散的であり，それらは最終的には形而上学的包括性という地平に収斂されて然るべきと思われるが，そこに至るまでの道程は平坦ではない．なぜなら，その道行きの随所には，所謂自然主義・反自然主義・実在論・反実在論を巡る踏み絵を強いる難所が方々に存在し，形而上学的包括性に到達する以前に，深穴（カスマ）に陥る危険性が待ち構えていると予測されるからである．さらに加えて，実際プラトン自身が形而上学的包括性をどの程度渇望していたのか，その志向性の強度は必ずしも自明であるとは言い難い．その意味においてコスモロジーとは，むしろプラトン哲学が形而上学的包括性という観点において如何に構造化されうるのか否か，その本来の姿を再査定するために有効な一つのパラメーターとして機能しうると推察される．

上記の見通しを踏まえ本稿は，プラトン諸対話篇に現れる各種コスモロジーの集大成ともいえる『ティマイオス』に焦点をあて，そこから導出される諸テーゼをあらためて整理し，爾後の形而上学的諸議論のゆくえを展望すると共に，最終的には何故にプラトンが『ティマイオス』を執筆したのか，その動機の在処に目を向けたいと思う．

２．『ティマイオス』を巡る諸文脈

『ティマイオス』が提示するコスモロジーから導出されうる諸テーゼを個別的に吟味する前に，『ティマイオス』（以下 *Tim.*と略記）を巡る諸文脈について簡潔に再整理することから議論を始めたい．

２−１．コスモロジーとポリティックス

プラトン諸対話篇においてコスモロジーが登場する文脈は，自然探求を純粋に目的とするものではなく，むしろ政治的色彩を濃厚に帯びると判断される．例えば『ポリティコス』に登場するコスモロジー（*Stat.*268d-274e）は，「政治家の肖像を厳密に描出する」（*Stat.*268c6-8）という試みの中でエレアからの客人が提案した「別の道に由来」（*Stat.*263a5）するものであり，また『法律』第 10 巻でアテナイからの客人が紹介するコ

[7] クロノロジーに関する偏向のない先行研究総覧として Guthrie（1975）. 以後例えば Howland（1991）; Brandwood（1992）; Robinson（1992）; Tarrant（1993-1994）; Nails（2002）etc.
[8] 起点として Stewart（1905）.
[9] Tarrant（1990）; Edmonds（2004）; Johansen（2004）; Sedley（2009）; Rowe（2009）; Burnyeat（2009）; Broadie（2012）etc.

スモロジー（*Laws* X 887c-905d）は，「法律全体のための最も立派で最も善い序文」（*Laws* X 887b8-c2）として機能することが期待され，さらに続く『エピノミス』が詳述するコスモロジーは，法律による国家統治を司る「夜明け前の会議」の構成員全員が習得すべき，必須の総合知の対象でもあった（*Epin*. 992d3-e1）．そして『国家』第 10 巻の掉尾を飾るエルの物語に現れるコスモロジーも，国制のあり方を支える正義への希求を正当化する役割を担い，ハデスを含む全宇宙世界で繰り広げられる魂の道行きを巡る一大絵巻物語（しかし実質的には朧気ではあるが...）を信ずる者は爾後，「上方への道行きを常に堅持する」（*Rep*. X 621c4-5）ことが保証された．

Tim.のコスモロジーも，基本的に上記の常套的路線，すなわち政治的文脈の中に位置付けられる．*Tim*.冒頭で再確認される最上の国制に関するソクラテスの諸提言を受けて，その後に続く議論展開を企画した当事者は，学識ある政治家（しかし婉曲的にではあるが，数学的諸学科を通して涵養される哲学的素養には実質的に縁遠い人物）として紹介されたヘルモクラテスとクリティアスの両名であった（20c4-d5）[10]．トゥキュディデスからも看取されるように[11]，シュラクサイの将軍ヘルモクラテスの弁論術的構成力には定評があり[12]，政治家の常として最終的には悲劇的な末路を辿るにせよ，彼はゲラの会議の成功をはじめとする華麗な武勇伝を歴史に刻んだ．また一方 *Tim*.に登場するクリティアスは，周知の如く 30 人政権を主導したクリティアスの祖父クリティアスであると解釈される．彼は幼少期より詩の吟誦に秀で（21b ff.），さらに彼の祖父クリティアス（すなわち，30 人政権のクリティアスの曾祖父クリティアス）から聞いたという系譜論的物語（縁起譚）に由来する多岐に亘る博識を，いまだに披瀝しうるという優れた記憶力を持つ文人であった（22a ff.）．このように，元来自然探求には縁遠い人文・政治領域で活躍するヘルモクラテスとクリティアスが，ソクラテスの政治談義に対する一種の返歌としてコスモロジーというモチーフを選択し，その語り手として「哲学全ての領域の頂上，すなわち天文学を極めた人物」（20a4-5）[13]，すなわちロクリスの政治家ティマイオスを指名する（27a3-8）．この段取りはヘルモクラテスとクリティアス両名の瞬時の閃きに由来するものではなく，実はその前夜，彼らが逗留していたクリティアス邸に戻る暗闇に包まれた道すがら，あれこれと逡巡する中で熟慮の末に辿り着いた一つの着想であった（20c5-d6）．何故に彼らは返歌の題材としてコスモロジーを選択したのか．むろんその背景には，上記概観したようにコスモロジーの政治的利用という弁論術的トポスの伝統が控えると思われるが，その既定路線の存在が，彼らの構想に決定的な影響を及ぼしたとも言い難い．おそらくそこには更

[10] *Tim*.におけるクリティアスとヘルモクラテスの人物像とその位置付けに関して，例えば Rowe（2004）および Dusanic（2002-2003）等もまた興味深い諸解釈を展開している．
[11] Th. 4.59ff; 6.33ff; 6.76ff. etc.
[12] トゥキュディデスがヘルモクラテスを高く評価すると共に少なからずの影響を受けていたことに関する史的研究として Fauber（2001）etc.
[13] 何故に「哲学的学問諸分野」の中で「天文学」が筆頭に位置するのか．この問題に関する論考として，和泉（2008）．

に加えて，プラトン『ティマイオス』執筆動機に関与したであろう様々な諸要素が重層的に関与すると思われる．この問題については本稿の後半で再び触れることにしたい．

２－２．イティオロジー（aetiology，縁起譚，*Aitia*）に由来する方法論の導入：政治・文学・コスモロジーの連携

さて，政治的文脈の中にコスモロジーを召喚する技法は，おそらくはヘシオドス『神統記』および『仕事と日』の相互連携に遡る宇宙論的規模における古来の教示的叙事詩の系譜に辿り着くとも推察される[14]．プラトン諸対話篇に現れる天空あるいは地下世界に関する他の諸言及もまた，この種の弁論術的説得性という観点において理解することが可能であろう．

しかし政治談義とコスモロジーを表層的に並置することによって醸成される弁論術的説得性には，自ずと限界が付随することもまた事実である．なぜならコスモロジーの披瀝を通して再提示される教示的諸言説を「信ずるに値する」という弁論術的勧誘を通して繰り返し喧伝したとしても，その受容あるいは拒否に関する選択の自由は，依然として最大限に保証されているからである．その意味において政治談義とコスモロジーの間には，根源的に不連続な断面が存在する．その両者を連続的に架橋する役割は，厳密な論理的推論に由来する必然性に委ねられうるものではない．

幼少期より恵まれた教育環境の中で育ったクリティアスは，各種神話伝承のみならず，その解釈学的方法論にも精通する文人としての学識を身に着けており，彼の先代クリティアスがソロンから聞いたというエジプト神官由来の神話解釈方法論を，ティマイオスがコスモロジーを語り始める直前に，爾後の重要な指針として披瀝する．その内容仔細は，前日彼らがクリティアス邸に戻る夜の暗闇に包まれた道すがら，幼少期に遡る記憶を辿りながら蘇らせたものであった（20c6-8）．

クリティアスが披瀝した解釈学的方法論の骨子は，イティオロジー（aetiology, 縁起譚, *Aitia*）というジャンルに帰属する，と本稿は判断する．すなわちそれは，神話伝承の表層的筋書きの背後に特定の自然現象を想定し，その原因・縁起に関する説明をミュートスと現実世界を架橋する何らかの痕跡・原因を提示することを通して，神話世界と自然現象双方を接合する説明体系構築に関わる文学的技法として総括される[15]．例えばヘリオスの子パエトンに纏わる神話は字義通りに解釈されて然るべきものではなく，それはむしろ「大地を巡って天を運行するものの軌道の逸脱と，長周期的にしばしば生起する大火による地上の事物の滅亡」という自然現象の原因を説明する物語として解釈され（22c3-d3），その痕跡・根拠として，幾たびもの大火を救済したナイル河の自然構造に関する説明が，新た

[14] 同様の問題はエンペドクレス『自然について』と『浄めについて』相互連関を巡る諸議論にも通底すると思われる．

[15] *Tim*. 冒頭のミュートスの役割を aetiology の観点から論じた先行研究は皆無に近いと思われる．ヘレニズム文学の技法としての aetiology を概観する論考として Miller (1982).

に付加されるのであった（22d3-e4）．またさらに，この縁起譚は「エジプトに保存されているものが，世界最古の伝承記録である」という主張の論拠としても機能し（22e4-5），そして最終的には，全世界の伝承記録の起源（アルケー）をエジプトが管轄するという（23a2-5），文書保存に関する一つの系譜論が，神話と自然構造解説の連携によって正当化されるに至る．

上記概観した縁起譚の方法論に立脚し，クリティアスは以下のように宣言する．

τοὺς δὲ πολίτας καὶ τὴν πόλιν ἣν χθὲς ἡμῖν ὡς ἐν μύθῳ διῄειμεν σύ, νῦν μετενεγκόντες ἐπὶ τἀληθὲς δεῦρο θήσομεν ὡς ἐκείνην τήνδε οὖσαν, καὶ τοὺς πολίτας οὓς διενοοῦ φήσομεν ἐκείνους τοὺς ἀληθινοὺς εἶναι προγόνους ἡμῶν, οὓς ἔλεγεν ὁ ἱερεύς. πάντως ἁρμόσουσι καὶ οὐκ ἀπᾳσόμεθα λέγοντες αὐτοὺς εἶναι τοὺς ἐν τῷ τότε ὄντας χρόνῳ.（*Tim*. 26c5-d5）

クリティアス「...昨日君（ソクラテス）が我々に対してミュートスを通してつまびらかにした市民と都市を，今ここで，この現実世界に移転した上で，あの都市とはこのアテナイのことであると，我々は提示することにしよう．そしてまた，君が考察していたあの市民とは，神官が語っていた我々の現実の祖先に相当すると，我々は宣言することにしよう．（ソクラテスが描出した市民と神官が語ったアテナイ市民の祖先の姿は）あらゆる観点において一致しており，かの往時に実在した市民に他ならないと語るとしても我々は的を外すことにはならないだろう...」（*Tim*. 26c5-d5）

ソクラテスの思考の産物として，ミュートスを通して提示された「あちら側の市民と都市（ἐκείνους；ἐκείνην）」（26d1；2）を，「こちら側の現実世界（ἐπὶ τἀληθὲς δεῦρο）」（26d2）に「移転する（μετενεγκόντες）」（26c8-d1）という手続きは，唐突に強制的に行われたものではなく，縁起譚を媒介として，緩やかな論理的正当と共に，穏やかに遂行されたといえよう．縁起譚は，メタフォラ（移転・比喩）の実践に関して有効に作用する．

このようなメタフォラの構造の中に，ティマイオスが語るコスモロジーもまた組み込まれていく．コスモロジーが描出する人間の根源的フュシスとソクラテスが描出する人間像を接合し，その姿を縁起譚を介して「こちら側の現実世界」に移転することによって，文人クリティアスと政治家ヘルモクラテスは，アテナイの都市と市民の黄金時代を，「ソクラテスに捧げるご馳走のお返し」（27a2-3）として再生することを，夜道の逡巡を経て，切に願ったと推察される．（その動機については，本稿の末尾で考察したい．）

３．ティマイオス的コスモロジーから導出される諸テーゼについて

さて，上記概観したように，メタフォラ（移転・比喩）に纏わるレトリカルな方法論を駆使することにより，「あちら側の存在」を「こちら側の現実世界」に円滑に「移転する」という手続きは，ティマイオスが披瀝するコスモロジーそれ自体の叙述展開随所においても，巧妙に踏襲されていると本稿は観察する．この種のレトリカルな技法を踏まえたメタフォラの実践を通して，思惟される世界に帰属する諸存在（特にコスモロジーの文脈においては，数学的諸概念および数学的諸対象）は，「あちら側の存在」から「こちら側の現実世界」へと，すなわち恒常不変の思惟的領域から生成消滅を繰り返す流動的感覚的領域へと（特段の違和感を伴うことなく）移籍されたと思われる．その結果 *Tim.*は，従来のコスモロジーが提示する諸テーゼを，大胆に転換することが可能になったと推察される．以下，その具体的事例について再吟味しよう．

３－１．宇宙の身体の事実上の不滅性

アリストテレス『天界について』等々が伝える当時のアカデメイア関連諸氏の諸反応からも看取されるように[16]，ティマイオス的コスモロジーが与えた衝撃の一つは，宇宙の身体の事実上の不滅性のテーゼに集約されると思われる．このテーゼは，例えば『パイドン』等々の根底を流れるソクラテス的世界観，すなわち「生成したもの，可視的，可触的な，身体的（物体的）存在は，必ず消滅する」という古来の命題を[17]，事実上，覆すものであった．

何故にティマイオスは，「生成したもの（宇宙）は，可視的，可触的，物体的性質を有するものとして存在するのが必然である」（31b4）という前提から出発しながらも，その事実上の不滅性という結論に辿り着くことが可能であったのか．その推論過程に潜むレトリックを，以下あらためて指摘したい[18]．

「生成したもの（宇宙）は，可視的，可触的，物体的存在であるのが必然である（σωματοειδὲς δὲ δὴ καὶ ὁρατὸν ἁπτόν τε δεῖ τὸ γενόμενον εἶναι）」（*Tim.*31b4）という前提に続き，以下の推論が披露される．

χωρισθὲν δὲ πυρὸς οὐδὲν ἄν ποτε ὁρατὸν γένοιτο, <u>οὐδὲ ἁπτὸν ἄνευ τινὸς στερεοῦ, στερεὸν δὲ οὐκ ἄνευ γῆς·</u> ὅθεν ἐκ πυρὸς καὶ γῆς τὸ τοῦ παντὸς ἀρχόμενος συνιστάναι σῶμα ὁ θεὸς ἐποίει. （*Tim.*31b5-8）

火を欠いては，如何なるものも決して可視的存在にはなりえず，<u>また，何か στερεόν なものが存在しなければ，如何なるものも決して可触的とはなりえず，また土を欠いては如何なるものも決して στερεόν にはなりえないだろう</u>．それゆえ神は，万有の身体を構築

[16] Arist. *de cael* .279bff.
[17] *Phaedo* 79aff; *Stat*. 269aff, 273bff.
[18] 和泉（2001）.

し始めるにあたって，これを火と土から作ろうとした．（*Tim*.31b5-8）

上記一節は，宇宙の身体を構築する際，何故にデーミウルゴスはまず最初に「火と土」を選択したのか，その理由・縁起を開示する．その意味において，上記一節は，一種の局所的な縁起譚として機能するといえるだろう．また，その一節に「στερεόν」（31b6）という言葉が二度，かなり不自然に登場することは看過されて然るべきではない．この文脈における「στερεόν」（31b6）への言及が，実質的に不要かつ意図的であったと見なしうる諸事由については，紙面制限の都合上，別途拙稿を参照していただければと思うが[19]，その議論を踏まえ，本稿においても以下の解釈を再び提起したい．すなわち上記の推論過程に二度現れる「στερεόν」（31b6）は，意図的曖昧さを伴う言葉として機能するが，その実質的意味内容は「硬さ」よりもむしろ「数学的立体」を一層指示する，と．

実際 *Tim.*において，上記の引用箇所の直後に突然，数学的立体構築に関する専門的議論が紹介されており（31c4），デーミウルゴスは宇宙の身体を「物体的性質を有するもの（σωματοειδές）」（31b4）としてではなく，「数学的立体の属性を有するもの（στερεοειδές）」（32b1）として構築し始めるのであった．このように「思惟的領域」を「感覚的領域」に移転（メタフォラ）する方策（メーカネー）を，デーミウルゴスは常に思案しており，その推論過程の開示に際して，二領域を緩やかに接合するためのレトリカルな技法が活用された，と本稿は推察する．

同様のティマイオス的技法は，宇宙の身体を万全に結合するために相応しい「最も立派な絆（δεσμῶν κάλλιστος）」（31c2）の選定を巡るデーミウルゴスの推論からも明瞭に看取される．その選択基準は「それ自身と縛る対象との最大限の一体化を実現できる（ὃς ἂν αὑτὸν καὶ τὰ συνδούμενα ὅτι μάλιστα ἓν ποιῇ）」か否かという観点で提示され（31c2-3），「それを本性上，最も見事に果たすのは幾何学的比例関係である（τοῦτο δὲ πέφυκεν ἀναλογία κάλλιστα ἀποτελεῖν）」という結論が直ちに提示される（31c3-4）．その根拠として機能したのは，任意の立法数や平方数を結ぶ比例関係各項の，その相互互換性に関する，文学的な比喩的表現であった（31c2-4, 32a5-7）．

さて，物質としての「火と土」，および非物体的な絆としての「幾何学的比例」を選択したデーミウルゴスは，宇宙の身体の事実上の不滅性を，以下の推論を通して説明する．

νῦν δὲ στερεοειδῆ γὰρ αὐτὸν προσῆκεν εἶναι, τὰ δὲ στερεὰ μία μὲν οὐδέποτε, δύο δὲ ἀεὶ μεσότητες συναρμόττουσιν· οὕτω δὴ πυρός τε καὶ γῆς ὕδωρ ἀέρα τε ὁ θεὸς ἐν μέσῳ θείς, καὶ πρὸς ἄλληλα καθ᾽ ὅσον ἦν δυνατὸν ἀνὰ τὸν αὐτὸν λόγον ἀπεργασάμενος, ὅτιπερ πῦρ πρὸς ἀέρα, τοῦτο ἀέρα πρὸς ὕδωρ, καὶ ὅτι ἀὴρ πρὸς ὕδωρ, ὕδωρ πρὸς γῆν, συνέδησεν καὶ συνεστήσατο οὐρανὸν ὁρατὸν καὶ ἁπτόν. καὶ διὰ ταῦτα ἔκ τε δὴ τούτων τοιούτων καὶ τὸν ἀριθμὸν τεττάρων τὸ τοῦ κόσμου σῶμα ἐγεννήθη δι᾽ ἀναλογίας ὁμολογῆσαν, φιλίαν τε

[19] 和泉（2001）．

ἔσχεν ἐκ τούτων, ὥστε εἰς ταὐτὸν αὐτῷ συνελθὸν ἄλυτον ὑπό του ἄλλου πλὴν ὑπὸ τοῦ συνδήσαντος γενέσθαι.（*Tim*.32b2-c4）

しかし実際，宇宙の身体は，数学的立体の属性を有するものとして存在することがふさわしい．そして数学的立体の場合には，決して一つの中項ではなく，常に二つの中項が結び合わせる．それゆえ神は，火と土の中間に水と空気を置き，そしてそれらが互いに，できるだけ比例するように，すなわち火対空気が空気対水に等しく，また空気対水が水対土に等しいように仕上げながら，可視的で可触的な宇宙を，結合させ，構築したのであった．そして，以上の理由により，またこれらの数において四つのものから，この宇宙の身体は，比例を通して相応しい存在として産み出され，またそれらから友愛を得たのである．その結果，それは，自らに自らを接合した存在として，これを構築した当事者（デーミウルゴス）以外の何ものによっても解体されえないものになった．（*Tim*.32b2-c4）

上記のデーミウルゴスの推論過程が端的に示す如く，宇宙の身体の不滅性は，「宇宙の身体は，数学的立体の属性を有するものとして存在することがふさわしい（στερεοειδῆ γὰρ αὐτὸν προσῆκεν εἶναι）」（32b2）という（当時としては）前代未聞の基礎定立に立脚する．デーミウルゴスは，数学的比例関係に関する縁起譚的説明技法を駆使しながら，思惟的領域に存在する幾何学的構造を可感的物体的宇宙へと移転すること（メタフェレイン）を通して，ティマイオス的コスモロジー冒頭の大前提，すなわち「生成したもの（宇宙）は，可視的，可触的，物体的存在であるのが必然である（σωματοειδὲς δὲ δὴ καὶ ὁρατὸν ἁπτόν τε δεῖ τὸ γενόμενον εἶναι）」（31b4）という言明の，その必然の帰結すなわち滅亡という事態を回避し，非物質的三次元延長体の数学的諸属性に由来する，事実上の不滅性の根拠・由縁・縁起を，宇宙身体に与えたのであった．その数学的諸属性を宇宙の身体から剥奪する権限は，それを構築したデーミウルゴス以外の何ものにも与えられていない．デーミウルゴスの意志は，数学的必然性を凌駕する（41a7-b6）．

そしてさらに付け加えれば，ティマイオス的コスモロジーの議論展開の基盤は，当時の新しい学問領域でもあった立体幾何学（ステレオメトリア）に由来し，デーミウルゴスは，その最新の諸成果（特に立方体倍化問題を巡る比例論的解決法）に精通していたといえよう．またプラトン『国家』からも看取されるように（*Rep*.528a4-e5），当時成長しつつあった立体幾何学に従事する研究者は，「気宇壮大な人々（μεγαλοφρονούμενοι）」であったと記される（*Rep*.528c1）[20]．『国家』において言及される立体幾何学研究者特有の「気宇壮大さ」と，同じ学問分野に精通する『ティマイオス』のデーミウルゴス（ティマイオス）の「気宇壮大さ」は，「深さを分け持つ次元」（*Rep*.VII 528b3-4）を研究対象に据える立体幾何学の，その考察対象の広さと深さに起因するとも推察される．

[20] μεγαλοφρονούμενοι という言葉は，現存する古典文献において，唯一この箇所においてのみ登場する．

３－２．エンペドクレス的四元素論の脱構築と善美概念の数学的基盤

上記概観したように，「感覚される現実世界」へと移転される「思惟される数学的領域」の実質的内容は，当時の最先端の学問領域でもあった立体幾何学の諸成果に，その多くを負うものであった．このような新しい学知総体のメタフォラを通して，宇宙の身体の事実上の不滅性に加えて，さらにエンペドクレス的四元素論の内実もまた，ティマイオス的コスモロジーにおいて大幅に刷新される．その主要局面を，残された紙面の都合上，以下駆け足で再吟味したい．

エンペドクレス的四元素論を脱構築するにあたり，デーミウルゴスは古来の宇宙論の冒頭を彩る既成の基本的概念，すなわち「アルケー（始源）」あるいは「ストイケイア（構成要素）」という従来の概念規定に対して，根本的な疑義を唱える（48b）．その折り，新たに彼が言及したのは「受容者・場」という第三の存在であった（48e-52e）．無秩序なカオス的状況を呈する「受容者・場」への言及は，第一義的には，古来の宇宙論の常套的枠組みを踏襲するというティマイオス的態度表明とも解釈される[21]．しかしまた一方では，先に検討した *Tim.*の叙述構造を鑑みるならば，「受容者・場」概念の導入は，かのエジプト神官が披瀝した縁起譚の役割と同様に，思惟的領域から感覚的領域へと，数学的諸概念を連続的に移転するために有効な，一種の接合面として機能した，と本稿は解釈する．

さあれデーミウルゴスは「宇宙が生まれる前には，これらすべてのもの（火，水，土，空気）はまだ比率も尺度もない状態にあったが（πρὶν καὶ τὸ πᾶν ἐξ αὐτῶν διακοσμηθὲν γενέσθαι. καὶ τὸ μὲν δὴ πρὸ τούτου πάντα ταῦτ᾽ εἶχεν ἀλόγως καὶ ἀμέτρως），これを神がはじめて，形と数を用いて構築した（πρῶτον διεσχηματίσατο εἴδεσί τε καὶ ἀριθμοῖς）」（53a7-b5）と宣言し[22]，エンペドクレス的四元素論の内実を，以下の基礎定立に基づき，脱構築する．

πρῶτον μὲν δὴ πῦρ καὶ γῆ καὶ ὕδωρ καὶ ἀὴρ ὅτι σώματά ἐστι, δῆλόν που καὶ παντί· τὸ δὲ τοῦ σώματος εἶδος πᾶν καὶ βάθος ἔχει. τὸ δὲ βάθος αὖ πᾶσα ἀνάγκη τὴν ἐπίπεδον περιειληφέναι φύσιν· ἡ δὲ ὀρθὴ τῆς ἐπιπέδου βάσεως ἐκ τριγώνων συνέστηκεν.（*Tim.*53c4-8）

まず第一に，火，土，水，空気が物体として存在することは，おそらく，万人に明かであ

[21] Orpheus DK1B12; Hesiod, *Th.*116-210 etc. コスモゴニアにおける「カオス的状態」を巡る古来の系譜について，例えば West（1997）; Mondi（1989）; Skemp（1985）; Tarán（1971）; Vlastos（1939）etc.

[22] プラトンおよびアリストテレスにおける「数と図形」に関する論考として Stenzel（1924）.

ろう．そして，物体の形状全ては深さを持っており，そしてまた深さを，絶対の必然として，面の性状が取り囲んでいる．さらに，直線が土台となる平面は，三角形から成り立っている．（*Tim*.53c4-8）

上記に現れる「物体として存在する（ὅτι σώματά ἐστι）」四元素は，もはやエンペドクレスのダイモン的地水火風とは明らかに異なり，比率と尺度に象徴される数学的立体の諸属性が，既に確実に付与されていた．その後に続くティマイオスの議論も「（特に立体幾何学に関する）専門教育を踏まえた諸方法論（τῶν κατὰ παίδευσιν ὁδῶν）」（53c1-2）に精通する者のみに理解可能な，五つの正多面体の構築と相互転換を巡るものであり[23]，その基礎定立は「ストイケイア乃至アルケーは，三角形である」という数学的言明であった（53d4-6）．このような立体幾何学に基づく諸検討を踏まえ，デーミウルゴスは，再びレトリカルな技法を散りばめながら，各種正多面体の数学的諸属性を従来の四元素論の枠組みへと移転する[24]．このメタフォラを通してエンペドクレス的四元素論の実質的内容は大幅に刷新され，所謂幾何学的原子論を説明原理に据えるコスモロジーが，物質転化論，感覚論，感情論，運動論，病因論，生成消滅論，人間創造論，教育論等々の幅広い領域を取り込みつつ，饒舌かつ精緻に繰り広げられるのであった．

さて，立体幾何学の諸成果を実質的な基盤に据えるティマイオス的コスモロジーの視座の下では，善美の概念もまた，数学的観点から描出される．

πᾶν δὴ τὸ ἀγαθὸν καλόν, τὸ δὲ καλὸν οὐκ ἄμετρον· καὶ ζῷον οὖν τὸ τοιοῦτον ἐσόμενον σύμμετρον θετέον.（*Tim*.87c4-6）

善いものはすべて美しく，また尺度を持たない美は存在しない．それゆえ，生けるものが，このような（善美なる）性質を持つためには，共約可能な存在でなければならない．（*Tim*.87c4-6）

善美なる存在の基盤として上記言及された「σύμμετρον」という概念は，通常「均衡」あるいは「対称性」等と邦訳されるが，本稿は敢えて「共約可能」という訳語を提案したい．なぜならティマイオス的コスモロジーに現れる「σύμμετρον」という言葉は，「均衡」あるいは「対称性」という洗練された概念を指示するというよりも，むしろ当時の立体幾何学の泥臭い現場を反映する数学的専門用語の意味合いを，色濃く宿すと解釈されるからである[25]．特に，デーミウルゴスが宇宙の身体を構築する際に選択した「最も美しい（立派な）絆」，すなわち立方数を二つの中項で結ぶ比例関係は（32b2-3），当時の立方体倍化問

[23] プラトンの五つの正多面体を巡る古典文献学的精査として Sachs（1917）．
[24] Izumi（1999）．
[25] Izumi（1999）．

題に深く関連するものであり，その比例関係の発見を通して，尺度を持たない長さ（ἄμετρον）を「深さを分け持つ次元」において共約可能な量（σύμμετρον）へと変換することが可能になった[26]．この画期的技法は「尺度を持たない無秩序な状態から，比例関係を有する共約可能な状態を作り出す」というデーミウルゴスの作業現場において[27]，大いに貢献したと推察される．

善美の概念が共約可能性（σύμμετρον）によって基礎づけられる，というティマイオス的コスモロジーの主張は，上記確認したように，共約不可能な量を巡る解決策が最終的には「深さを分け持つ次元」において執行されるという，当時の立体幾何学の成果を実質的に反映すると思われる．その意味においてデーミウルゴスの作業とは，尺度を持たない存在に対する，全宇宙的規模での対処法を示す大がかりなデモンストレーションであった，と解釈することも「理に適った（エイコース）」ものといえるのではないだろうか，と本稿はあらためて提起したいと思う．

４．プラトン『ティマイオス』執筆動機を巡って

ティマイオス的コスモロジーは，西方世界イタリアの新しい学問的諸成果を，当時のアカデメイアの面々に披露するものでもあった．スペウシッポスやクセノクラテスが証言するように[28]，それはプラトン独自の作品とは言い難く，実質的にはピュタゴラス学派の書物に，その多くを負うと判断される．その意味においてもコスモロジーの語り手は，ティマイオスでなければならなかった．そしてまた彼を指名したのは，学識ある政治家として名の通ったシュラクサイのヘルモクラテスとアテナイの先代クリティアスでなければならなかった．ソクラテス（そしてプラトンをはじめとするアテナイ土着の学徒）にとって，ティマイオス的コスモロジーは外来の思想なのである．

ここで今一度，ソクラテス自身が立脚した世界観を振り返りたい．『ソクラテスの弁明』および『パイドン』等から明瞭に看取されるように，ソクラテスが自ら吐露する世界観は，大地おおび地下世界から構成される[29]．ソクラテス的「魂への配慮」の根底には，魂の帰還先としてのハデスの存在が確実に控えるといえよう．そしてさらに，そのハデスの存在を支えるものは，古来の東方文化圏に由来する，おそらくはヘブライズム的伝統に吸収されるであろう神話伝承の，厚い堆積であった．

しかしティマイオスが披瀝するコスモロジーには，ハデスは存在しない．宇宙全域を視野に収めるデーミウルゴスにとって，死すべき種族の魂の帰属先はハデスではなく，地球や月をはじめとする複数の星々であった（41e-d）．そしてさらにその彼方には，数列によ

[26] Archytas DKB1; *Theaet*. 147d-148d; *Laws* VII 819d-820c; *Epinom*. 990dff; Euclid VIII Prop.12 etc.
[27] *Tim*. 53eff, 69bff, 73cff, etc.
[28] Speusippus Fr.40 Lang; Xenocrates Fr.68 Heinze.
[29] *Phaedo* 110b-114c; *Apol*. 41a-c.

って構成され「数理や調和を宿す」宇宙霊魂が，宇宙の身体の至る所ににくまなく織り込まれている（35a-37c）．ティマイオス的「魂の配慮」の頭上には，魂の故郷としてのコスモスが厳然と拡がり（90a-d），その不可視の秩序構造は，天文学を筆頭に据える数学的諸学科の学習を通して顕現するものであった．

この対比に基づき本稿は，プラトン『ティマイオス』執筆動機について，以下のように忖度する．すなわちプラトンは『ティマイオス』を通して，「魂への配慮」というモチーフをソクラテス的世界観から新しいコスモスへと移転（メタフェレイン）し，そこに誕生した「天空の植物」（90a5-7）としての新しい人間像をアテナイの祖先に据え，さらに往時のアテナイの黄金時代を『クリティアス』において再生することを通して，「地上の自称裁判官（アテナイ市民）から解放されハデスの無数の住人と親しく交わり，問答し，吟味する」（*Apol.* 41a-c）ことを選択した（実質的にはアテナイ市民に三行半を突きつけた）ソクラテスの魂に対する，プラトンならではの「捧げ物」を作製することを試みたのではなかろうか，と．

そしてさらに『ティマイオス』に由来する諸テーゼは，プラトン諸対話篇各所において，再び厳しい精査が加えられることもまた，看過すべきではない．例えば天文学を筆頭に据えるティマイオス的教育プログラムは，『国家』において数学的諸対象相互の存在論的・認識論的関係という観点で大幅に再編成されると共に，ティマイオス的宇宙像との決別をも辞さないディアレクティケーの技法が，最重要科目として新たに導入された．また善美概念の数学的基盤に関しては『ピレボス』において，あるいはストイケイアを巡る知識論については『テアイテトス』および『ソフィステス』において，あるいは立体幾何学を射程に入れた共約不可能性に関する数学的考察は『テアイテトス』や『法律』そして『エピノミス』において，等々，その諸々の吟味の痕跡は，枚挙に暇がない．ティマイオス的コスモロジーが提起する諸論点は，爾後，プラトン的ディアレクティケーの主要基礎定立として，思想史的転換期において，様々な思索者が継承・再生しており，今日においてもなお，そして未来においても確実に，人類の思想史（含む・哲史文および自然科学の全領域）の不滅の骨格を形成すると推察される．

Bibliography

Bluck R. S. - *Plato's life and thought*, with a translation of the seventh letter. London : Routledge & Kegan Paul, 1949.

Broadie S. - *Nature and Divinity in Plato's* Timaeus, Cambridge University Pr. 2012.

Cherniss, H.F. - The Relation of the *Timaeus* to Plato’s Later Dialogies, *AJP* 1957 LXXVIII : 225-266.

Colvin, Matthew. - Heraclitean flux and unity of opposites in Plato's *Theaetetus* and *Cratylus*. *CQ* 2007 N. S. 57（2）: 759-769.

Edmonds, Radcliffe Guest. - *Myths of the underworld journey in Plato, Aristophanes, and the*

Orphic gold tablets. Cambridge University Pr., 2004.

Dusanic, Slobodan. - The unity of the « Timaeus-Critias » and the inter-Greek wars of the mid 350's. *ICS* 2002-2003 27-28 : 63-75.

Fauber, C. M. - Hermocrates and Thucydides: rhetoric, policy, and the speeches in Thucydides' « History ». *ICS* 2001 26 : 37-51.

Fritz K., von. - *Pythagorean politics in Southern Italy*. New York: Columbia Univ. Pr., 1940.

Irwin T. H. - Plato's Heracliteanism. *PQ* 1977 XXVII : 1-13.

Izumi, C. - *The Role of Stereometry in Plato's Thought*, 1999.

Johansen, T. - *Plato's Natural Philosophy: a Study of the* Timaeus-Critias, Cambridge Univ. Pr. 2004.

Kahn, Charles H. - Why is the *Sophista* sequel to the *Theaetetus*. *Phronesis* 2007 52（1）: 33-57.

Keyt D. - The mad craftsman of the *Timaeus*. *PhR* 1971 LXXX : 230-235.

Lloyd Geoffrey E. R. - Plato and Archytas in the Seventh Letter. *Phronesis* 1990 XXXV : 159-174.

McCabe, Mary Margaret. - *Plato and his predecessors : the dramatisation of reason*. Cambridge University Pr., 2000.

Meinwald, Constance Chu. - Plato's Pythagoreanism. *AncPhil* 2002 22（1）: 87-101.

Michaelson S. ; Morton A. Q. - The new stylometry. A one-word test of authorship for Greek writers. *CQ* 1972 XXII : 89-102.

Morrow G. R. - Plato's theory of the primary bodies in the *Timaeus* and the later doctrine of forms. *AGPh* 1968 L : 12-28.

Novak J. A. - Plato and the irrationals. *Apeiron* 1982 XVI : 71-85.

Ostenfeld E. - Plato's development and the date of the *Timaeus*. *C&M* 1986 XXXVII : 63-87.

Owen G. E. L. - The place of the *Timaeus* in Plato's dialogues. *CQ* 1953 XLVII : 79-95.

Raven J. E. - *Plato's thought in the making. A study of the development of his metaphysics*. Cambridge : Cambridge Univ. Pr., 1965.

Rist J. M. - Parmenides and Plato's *Parmenides*. *CQ* 1970 XX : 221-229.

Rowe, Christopher J. - The case of the missing philosophers in Plato's « Timaeus-Critias ». *WJA* 2004 N. F. 28（b）: 57-70.

Sachs E. *Die fünf Platonischen Körper*, Arno Press, 1917.

Sayre Kenneth M. - *Plato's dialogues in the light of the Seventh Letter. Platonic writings* : 93-109.

Sayre, Kenneth M. - The role of the *Timaeus* in the development of Plato's late ontology. *AncPhil* 1998 18（1）: 93-124.

Sedley, David N. - Myth, punishment and politics in the « Gorgias ». *Plato's myths* 2009 : 51-76.

Solmsen F. - Parmenides and the description of perfect beauty in Plato's *Symposium*. *AJPh* 1971 XCII : 62-70.

Stenzel J. - *Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles*. Leipzig 1924.

Stewart T. – *The Myth of Plato*. London: Macmillan and Co. 1905.

Tarrant H. A. S. - Myth as a tool of persuasion in Plato. *Antichthon* 1990 XXIV : 19-31.

Ryle G. - *Plato's progress*. Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1966.

Vlastos G. - Plato's testimony concerning Zeno of Elea. *JHS* 1975 XCV : 136-162.

和泉ちえ　Timaeus 31b4-32c4 再考：宇宙の身体の事実上の不滅性のテーゼと立体幾何学　日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』XLIX（2001）pp. 26-38.

------- ピュタゴラス学派の学問論―アルキュタス断片 B1 とプラトン『国家』における五つの数学的諸学科― 『ギリシャ哲学セミナー論集』vol.V（2008）pp.34-52.

【補記】

セミナー発表時に，山本巍先生，荻原理先生，柴田有先生，金山弥平先生，納富信留先生，内山勝利先生，荻野弘之先生，瀬口昌久先生，三嶋輝夫先生，今井知正先生，田中裕先生から有益なご質問を頂戴した．ご提示いただいた諸論点に関して，今後も折りに触れては各々の先生方と忌憚のない議論を継続させていただきたいと心より願っている．また荻野先生からは，その後プラトンのコスモロジーに関する御高論をお送りいただき，大いに触発された．以上の先生方をはじめ，拙発表に耳を傾けていただいた会場の諸先生方にも，深く感謝申し上げる．